

都市の歴史的市街地の集住体における居住環境と環境認知の関係性
 - 東上野街区における環境認知の構成の変化について -

日大生産工(学部) ○涌井 麻理菜
 日大生産工(院) 高野 祐太
 日大生産工 大内 宏友

1. 研究の目的

東京における歴史的市街地では、居住、道、川、細街路など歴史的な環境と連続的な繋がりを培ってきた。だが、現代の歴史的市街地においては共有の意識は失われつつあるといえる。

都市の歴史的市街地の集住体における居住環境と環境認知の関係性を考察することを目的とし、本研究では、東上野街区における環境認知の構成の変化について分析・考察を行う。

2. 研究概要

2. 1. 調査対象地域

調査対象地域：東上野3丁目19～32番地（図1）

2. 2. 調査期間・調査方法・調査内容

アンケート調査は以下の概要で行った。

■調査期間

第1期：1996年6月18日～7月2日

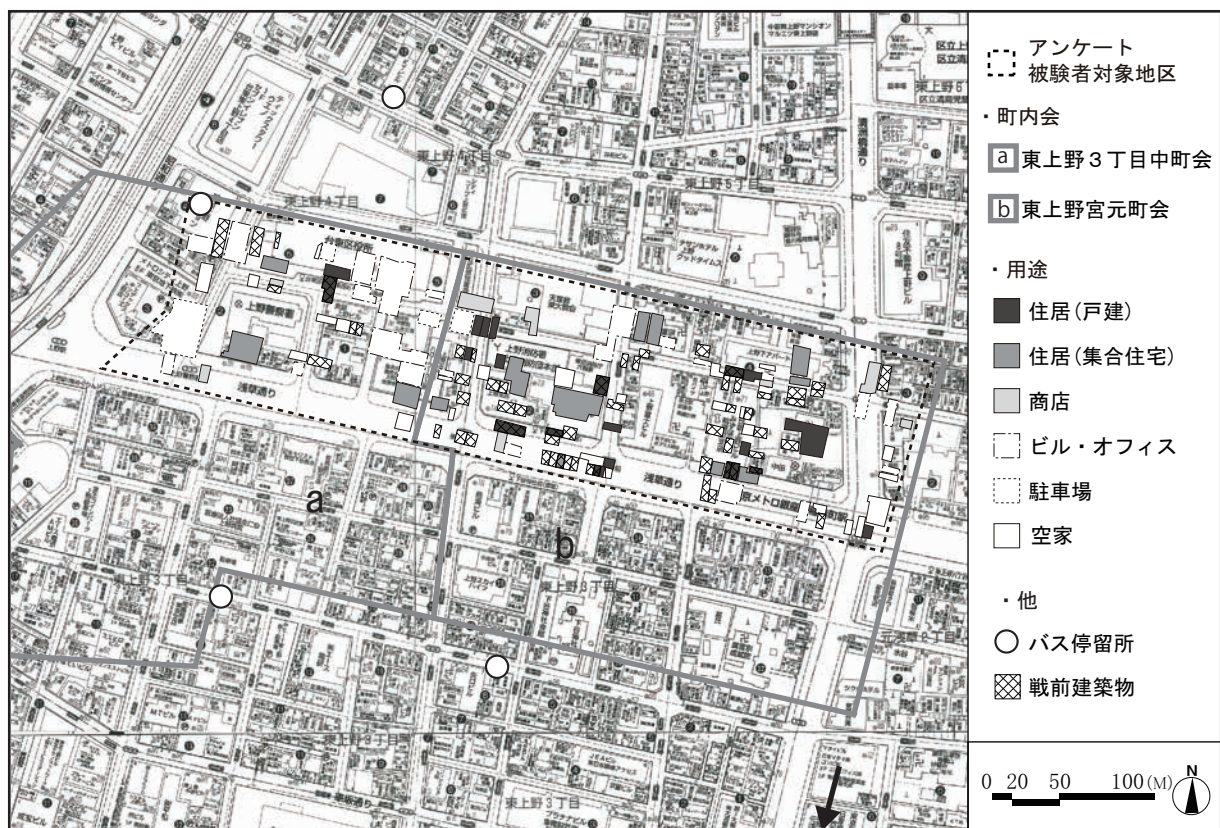
第2期：2012年7月28日～8月19日

■調査方法

現地調査では1/200の白地図とアンケート記入用紙を使用し、ヒアリングによる悉皆調査を行った。調査対象は中学生以上の地域住民とし、基本的にアンケート記入用紙は調査員が記入し、白地図は被験者に記入してもらった。結果、有効回答数が1996年は64サンプル、2012年は63サンプルが得られた。アンケート内容と被験者概要を以下に示す。

表1 アンケート内容

調査項目	調査内容
属性調査	年齢、性別、居住年数、家族構成
街区調査	戦前建築、ビル、商店、再開発地、空地 路地寄与率、路地エッジ数、平均階高
領域調査	・近隣付き合いの領域を地図上に記入してもらう ・日常生活行動の領域を地図上に記入してもらう
生活調査	・冠婚葬祭への参加の有無 ・冠婚葬祭時の路地使用の有無 ・共有物の有無 ・家屋について増改築の有無
意識調査	・環境変化について ・外部からの視線について ・環境に対する改変の意志について



Formulation of Habitat and Environmental Recongnition Relationships of Historical Downtown of City
 -the Physical Environmental Change in the Higasiueno Blocks-
 Marina WAKUI, Yuta TAKANO and Hirotomoto OHUCHI

表2 被験者概要

項目		人数	
		1996年東上野	2012年東上野
性別	男性	38	28
	女性	25	35
年齢 (歳)	12～40	9	2
	41～55	12	11
	56～70	27	21
	71～	16	29
居住年数 (年)	～15	6	7
	16～30	4	2
	31～45	22	10
	46～60	21	20
	61～	11	24
合計		64	63

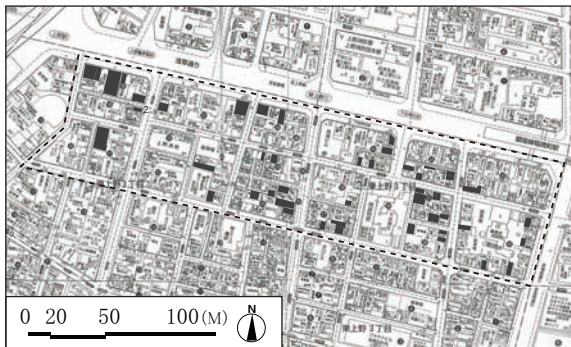


図2 1996年東上野被験者の家の位置



図3 2012年東上野被験者の家の位置

3. 1. 1996年－2012年における物理的変化

1996年と2012年の対象地区内の建物の用途を比較し、1996年－2012年の建て替え・用途変更があった場所を地図に示した。(図1)

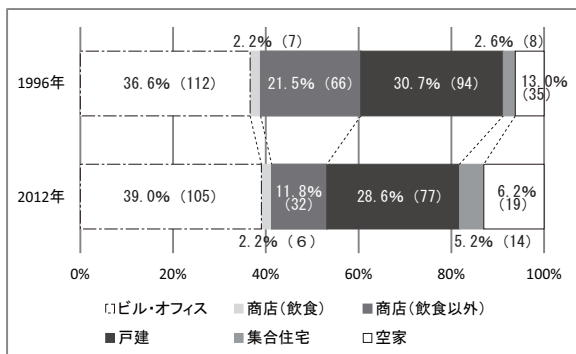


図4 用途割合変化

図1・図4より対象地域全体の用途の割合において考察する。

ビル・オフィスは、東上野3丁目中町会側に用途変更が多く見られ2012年に増加している。商店は、1996年－2012年にかけて数が半分以下の21.5%から11.8%と約9.7%減少している。特に、飲食店以外の商店が大きく減少した。住宅は、2012年の用途の割合をみると、戸建住宅は28.6%、集合住宅は5.2%と戸建住宅が多くを占めるが、1996年と比べると、戸建住宅は2.1%減少し、集合住宅は2.6%増加した。空家の箇所は6.8%増加している。

1996年から2012年の物理的変化として、交通網の増加や商業施設の充実がみられる。交通網では、2000年に地図を越えたの南方向(図1矢印の方向)に都営大江戸線、つくばエクスプレスが通る「新御徒町駅」が設置され、2004年に台東区循環バス「めぐりん」の運行開始した。「めぐりん」について、地図内の停留所を地図上に○で示した。それぞれ、北側に台東区役所前、北西側に上野駅、南西側に永寿総合病院、南側に永寿総合病院東である。商業施設では、1996年の8月に上野駅の駅の中にショッピングモールが開業した。

3. 2. 戦前建築物(図1)

1947年と2012年の地図を比較し、住民の変化がなく、建て替えされていない場所を示し戦前建築物とした。

戦前建築物は下谷神社周辺に多く見られる。調査対象地域では、a. 東上野3丁目中町会は6軒、b. 東上野宮元町会内は49軒である。

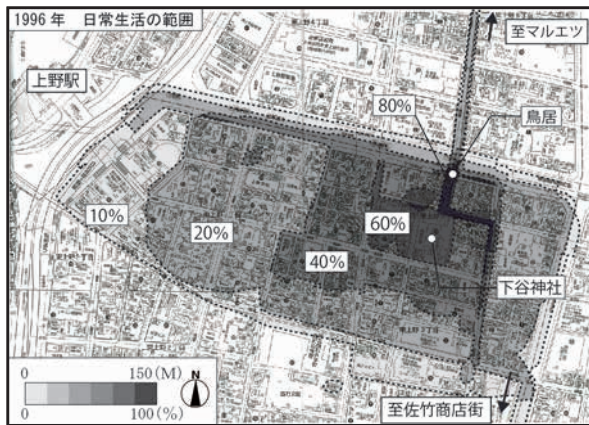
4. 居住者の環境認知についての考察

圏域図示法*1)を用いた認知領域調査より被験者の「近隣付き合いの範囲」と「日常生活の範囲」の認知領域を集計し、東上野3丁目をまとめた認知領域図を作成し分析を行った。認知領域図のプロットは認知領域の構成要素*2)を表し、パーセンテージは各認知項目の領域を認知しているかを表している(以降認知強度と呼ぶ)。表の%は認知度*3)を表している。認知領域図及び認知領域の構成要素の項目順位表から、居住者全体の認知領域の広がりや構成要素について次のように分析する。

■1996年「近隣付き合い」の範囲(図5)

認知強度の強い領域が2箇所あり、調査対象地域に2つの町内会が含まれていることから、町内会の境界で二分されていることが分かる。認知領域の構成要素の項目順位表からも「町内会」が上位であることから、町内会での付き合いが「近隣付き合いの範囲」に影響していることが分かる。

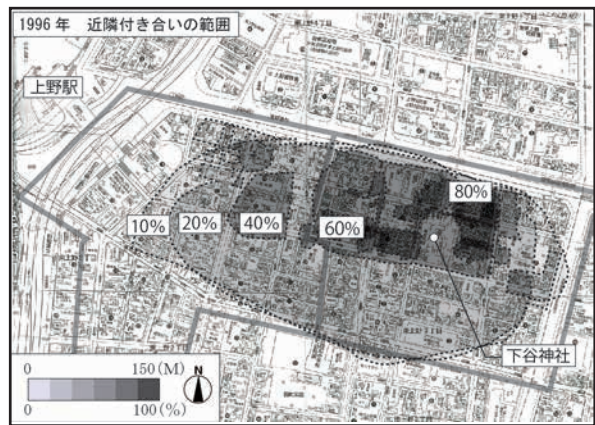
戦前建築物と認知領域より、宮元町会側は東上野3丁目25・27・31・34・35番地、東上野3丁目中町会側は東上野3丁目38・39丁目の認知



1996年「近所付き合い」構成要素項目順位表

順位	項目	度数	%
1	町内会	34	56.7%
2	仕事	13	21.7%
3	その他	5	8.3%
4	買い物	4	6.7%
5	散歩	2	3.3%

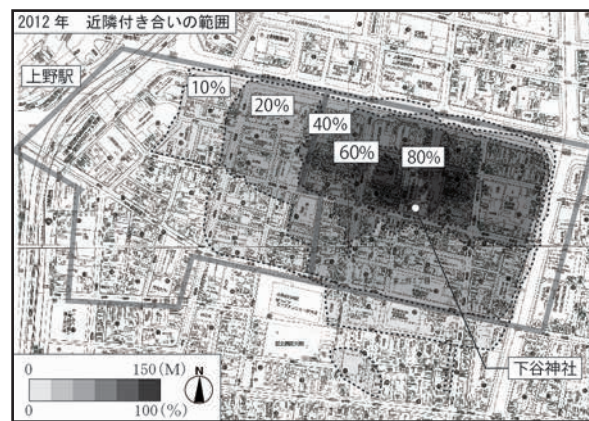
図5 1996年「近隣付き合い」認知領域



1996年「日常生活」構成要素項目順位表

順位	項目	度数	%
1	買い物	33	50.1%
2	町内会	15	23.1%
3	仕事	10	15.4%
4	散歩	5	7.7%
5	その他	2	3.0%

図7 1996年「日常生活」認知領域



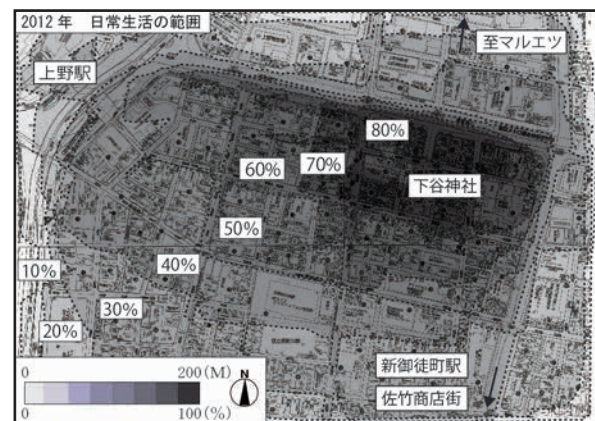
2012年「近所付き合い」構成要素項目順位表

順位	項目	度数	%
1	町内会	28	47.5%
2	その他	24	40.7%
3	買い物	3	5.1%
4	仕事	2	3.4%
4	散歩	2	3.4%

その他項目表

順位	項目	度数	%
1	近所付き合い	21	87.5%
2	祭りなどの行事	1	4.7%
3	学区	1	4.7%

図6 2012年「近隣付き合い」認知領域



1996年「日常生活」構成要素項目順位表

順位	項目	度数	%
1	買い物	46	57.5%
2	散歩	12	15.0%
3	町内会	10	12.5%
4	仕事	9	11.3%
5	その他	3	3.8%

図8 2012年「日常生活」認知領域

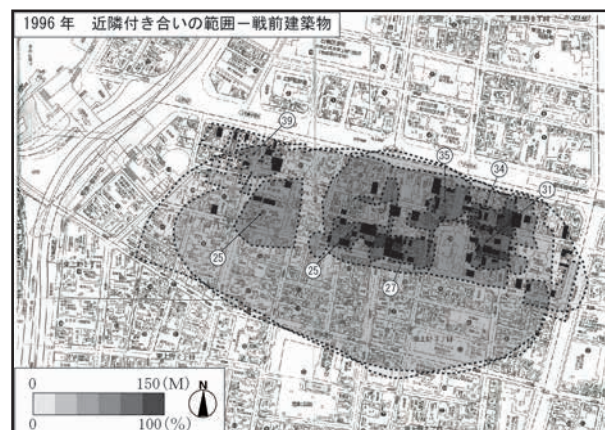


図9 1996年の認知領域と戦前建築物



図10 2012年の認知領域と戦前建築物

強度が強い。(図9)

■2012年「近隣付き合い」の範囲(図6)

宮元町会側に認知強度が強く、東上野中町会側の認知が弱い。認知領域の構成要素の項目順位表から「町内会」が1位であり、認知強度も町内会を境に変化していることが分かる。

認知領域の広がりを中心は東上野3丁目25・27・31・34・35番地であることから、戦前建築物の周辺から道路を境界にして南方向に認知領域が広がっていることが分かる。

■1996年「日常生活」の範囲(図7)

下谷神社の鳥居から上野駅・マルエツ・佐竹商店街へ向かう道路に沿って認知領域が広がっていることが分かる。認知領域の構成要素の項目順位表で「買い物」が1位であることから、住民の「日常生活の範囲」に買い物が大きな影響を与えていることが分かる。

さらに認知領域は下谷神社周辺を中心として南方向に面的に広がっている。

■2012年「日常生活」の範囲(図8)

町内会や大通りを超えた広範囲の認知領域となった。要因として、地下鉄の開通や台東区循環バスの運行開始による交通網の充実、上野駅の商業施設の充実が影響していると思われる。

認知領域の広がり方について南方向の認知強度が10%減っていくごとに認知領域が道路を境界に広がっていることが分かる。

■1996年、2012年の「近隣付き合いの範囲」の認知の比較

認知領域の広がり方について1996年「近所付き合いの範囲」は楕円形に2012年「近所付き合いの範囲」は道路を境界とした広がり方を示しているが、共に北方向は浅草道路でとまり、南方向への認知領域が広がっている。

1996年、2012年共に東上野3丁目27・31・34・35番地の認知が強く、戦前建築物がまだ残る場所であるからだと思われる。また、1996年は東上野3丁目22・39番地の認知強度が強かったが、2012年には認知強度が弱くなっている。主な要因として、東上野3丁目中町会側に戸建住宅が高層建築へ再開発されたことが影響していると思われる。(図9、図10)

1996年、2012年の認知領域の構成要素の項目順位表より共に1位は「町内会」だが、2012年の項目順位表では2位に「その他」の項目があり、「近所付き合い」の項目が高くなっていることが分かる。

■1996年、2012年の「日常生活の範囲」の認知の比較

1996年はマルエツや佐竹商店街、上野駅への道路に沿う認知領域の広がりが見られるが、2012年には下谷神社を中心とする面的で広範囲な広がりとなった。このような認知領域の拡大の主な要因として、都営大江戸線「新御徒町駅

」の設置、台東区循環バスの運行開始が影響していると思われる。1996年、2012年の認知領域の構成要素の項目順位表を比較すると、共に1位である「買い物」は2012年に、より高い割合を占めるようになった。また、「散歩」の割合が高くなっていることが分かる。

■まとめ

本研究について以下の考察を得た。

①1996年-2012年の東上野3丁目の物理的変化において、都営地下鉄大江戸線「新御徒町駅」・台東区循環バスの開通が住民の「日常生活の範囲」の認知領域に大きな影響を与えており、認知領域を広範囲なものとした。

②1996年・2012年「近隣付き合いの範囲」「日常生活の範囲」全ての認知領域で下谷神社周辺の認知強度が強い傾向が見られた。

【注 釈】

* 1) 圏域図示法：この方法は対象地域を認知している被験者を対象とした場合に有効であり、自己の住居の周辺地区などの比較的

限定された小地域の空間を対象とした研究に適している。認知の有無や広がりなどの量的な側面だけでなく、被験者の内部にある空間の切れ目を示してもらうことにより、間接的にその構造を探ろうとするものである。

* 2) 構成要素：各認知領域の構成要素、点的要素、線要素、面的要素、時間変動要素に分類する。構成要素相互のまとまりを分析することは地域における認知領域の把握において重要である。

* 3) 認知度：ある地域において、個人(サンプル)が認知する場所の和がその地区の回答者数占める割合。その場所における認知のレベルを示す値。[認知強度=[認知項目数/回答者数]×100]

* 4) 時間的変動要素：認知領域を構成する要素において、視覚的な要素だけでなく、聴覚や嗅覚などの知覚できる要素、移動している乗り物や動物などの時間的経緯で変化する要素も取り扱う。

【既往研究論文】

1) 太田光則・大内宏友：「都市の歴史的市街地の細街路空間における集住環境の実証的研究－生活領域の実態よりとらえた細街路空間の類型化－」日本大学生産工学部平成8年度修士論文概要集、1996年

2) 井尻智・大内宏友：「都市における近隣・生活領域の画像処理を用いた集合単位の設定」日本建築学会技術報告集、第12号 pp. 215～218、2001年

3) 大内宏友・井尻智・竹田真一郎・桜井雅顕・山田浩一郎：Corroborative Study on Alley Space in the Environment of Multiple Dwellings in the Urban Traditional Areas in Tokyo, STUDIES in ANCIENT STRUCTURES. Proceedings of the 2nd International Congress, 2001

4) 大内節子・山田悟史・大内宏友：Study of the dwelling environment formation process in historical urban areas of Tokyo, ENHR (European Network for Housing Research) International Conference, Rotterdam, Kingdom of the Netherlands, 2007

5) 千葉勝仁・高野祐太・大内宏友：「都市の歴史的市街地の集住体における環境認知の形成に関する研究－月島街区における環境認知の構成とその変化について－その1」日本建築学会大会概要集、2012年

6) 高野祐太・千葉勝仁・大内宏友：「都市の歴史的市街地の集住体における環境認知の形成に関する研究－月島街区における環境認知の構成とその変化について－その2」日本建築学会大会概要集、2012年